The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	アルフォンソ二世・デステ治下のフェラーラにおける演劇的騎馬試合ー「驚異の祝祭」の発想と上演ー
Author(s)	小松, 啓子
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/101580
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　　小松　啓子　　）	
論文題名	アルフォンソ二世・デステ治下のフェラーラにおける演劇的騎馬試合 ――「驚異の祝祭」の発想と上演――

論文内容の要旨

本論文は、初期近代にフェラーラを支配していたエステ家の当主アルフォンソ二世・デステ（AlfonsoⅡ d’Este, 1533-1597, 在位1559-97）が、1561年から1570年までに5度にわたって開催した演劇的騎馬試合（Cavalleria, Torneo a Tema）と呼ばれる催しについて、その実態と主催者たちの意図、そしてそれが芸術史において占める位置を明らかにすることを目的とする。

アルフォンソ二世が自身の宮廷で催した演劇的騎馬試合については、これまでほとんど研究がなされてこなかった。その理由はいくつか考えられるが、ひとつには、もっとも特徴的で大規模な上演となるはずだった《祝福された島》（1569年）が失敗に終わったことが挙げられるだろう。また、アルフォンソ二世の宮廷では、演劇的騎馬試合が上演されなくなった後の1572年、トルクアート・タッソが廷臣となり、牧歌劇《アミンタ》の上演や、長編叙事詩『解放されたエルサレム』の出版など、華やかな活躍を続けた。さらに、1570年代からはコンチェルト・デッレ・ダーメ（貴婦人たちのコンチェルト）と呼ばれる宮廷女性による声楽アンサンブルが活動をはじめ、他国にも名声が広まっていく。このような状況において、アルフォンソ二世の即位から間もない時期に、上演されたものの失敗に終わった演劇的騎馬試合が、これまで注目を集めなかったのも無理はないように思われる。

しかし、一度その上演の詳細を知ると、内容の多彩さ、主題の幅広さ、費やした財力のどれをとっても、先述の牧歌劇やアンサンブルとは比較にならないことがわかる。その企画および準備の場では、それまで各宮廷で行われてきた騎馬試合とはまったく異なる、新たなジャンルが作られようとしていた。1569年の《祝福された島》は悲惨な事故により計画通りの上演はかなわなかったが、本来であれば、濠に奇天烈な造形の怪物が浮かび、魔女の誘惑に陥落した騎士はうつくしい庭園でニンフと踊り、炎や花火が飛び交って古代神話の女神たちが歌うという、それまでにない独特な光景が繰り広げられるはずだった。

こうした演劇的騎馬試合について、先行研究は先に述べた通り、ほとんどないと言っても過言ではない。唯一、アレッサンドロ・マルチリアーノが一次資料を研究し、詳細な記述を伴う書籍“Chivalric Festivals at the Ferrarese Court of AlfonsoⅡ d’Este”を2003年に出版しているが、これは演劇的騎馬試合それ自体の研究にとどまり、その発想の源泉や後の諸芸術への影響などについて広い視野からの考察が不足しており、演劇的騎馬試合の芸術史における位置づけを考えるには至っていない。その他の研究では、演劇的騎馬試合は、研究対象としてではなく、脇役としてそのような催しがあったことにすこし触れられる程度にとどまるものがほとんどである。

本論文では、上述のようにこれまで重要視されていなかったアルフォンソ二世の宮廷における演劇的騎馬試合に光を当て、その企画過程から上演準備にいたるまで、そして実際の上演内容と、それが芸術史上に占める位置について、一次資料から明らかにしたい。

そのために、上演と同時期に出版された詳細な記録をもとに、上演の内容を再構築する。1561年に催された2回の演劇的騎馬試合（《ゴルゴフェルサの城》および《フェローニアの山》）と、1565年に上演された《愛の神殿》の記録は、1566年にフェラーラで、翌年に改訂されてヴェネツィアで出版された。一方、1569年に行われた《祝福された島》については、アルフォンソの重臣であったエルコレ・エステンセ・タッソーニが詳しく記しているが、ここに記されているのは当初の計画であり、実際の上演内容とは異なる。1570年に上演された《きらめく魔法使い》の記録は、同年に出版された。

さらに、以上の演劇的騎馬試合を考案した人々の発想の源泉を明らかにするとともに、1560年代当時の資料から、上演にいたるまでの準備について、職人や芸術家の同定をおこないながら明らかにすることを目指す。この1560年代当時の資料とは、イタリアのモデナにあるモデナ国立文書館に所蔵されている宮廷人の給与記録、宮廷の支出記録、外国にいる大使からアルフォンソ二世に宛てた手紙、そして図版資料である。以上のような再構築を経て、アルフォ

ンソ二世の宮廷における演劇的騎馬試合が、上演を重ねるにつれて音楽劇化していったこと、そして後の芸術に影響を与えたことを明らかにする。

以下に論文の構成を述べる。論文は全七章からなる。第一章では、アルフォンソ二世の生家エステ家の歴史と、16世紀のイタリア半島が置かれた情勢について述べる。第一節では、15世紀以降のフェラーラについて、君主であったエステ家の当主たちについて概観する。彼らはいずれも文芸・芸術の保護者として知られていたため、各々が自身の宮廷に迎えた芸術家についても言及する。第二節では、15世紀から16世紀にかけて、フェラーラを取り巻いていた状況について述べたい。この時代のイタリア半島は、イタリア戦争のさなかにあり、フェラーラもまた神聖ローマ帝国やフランス王国といった大国の間で揺れ動いた。さらに、フェラーラ接収を狙うローマ教皇とは100年近くにわたって難しい関係にあった。当時の宮廷祝祭には多分に外交を中心とする政治的側面があり、祝祭を研究するうえでは、こうした状況について知ることが不可欠である。

第二章では、騎馬試合について、その歴史と変遷を追う。第一節では、騎馬試合という催しの歴史について、簡単に述べる。騎馬試合は11世紀から12世紀にかけて、フランスで成立し、発展した。しかし、成立当時の騎馬試合と16世紀の騎馬試合は、名前は共通しているもののまったくの別物と言って差し支えないものであった。第二節では、伝統的なものから大きく変容を遂げた16世紀の騎馬試合について、代表的な事例をあげて、その変化について考えたい。そして第三節で、すでに解説したどの騎馬試合とも異なる独創的な性格をもつアルフォンソ二世の宮廷の演劇的騎馬試合について、もっとも特徴的だと考えられる1569年の《祝福された島》の概要を述べて説明する。

第三章では、アルフォンソ二世とその宮廷の人々が演劇的騎馬試合の出典を求めた先を明らかにする。第一節では同時代のフランスで、摂政となったカトリーヌ・ド・メディシスが主催した祝祭をとりあげ、フェラーラへの影響について検討する。第二節ではルドヴィーコ・アリオストの長編叙事詩『狂えるオルランド』について、演劇的騎馬試合との関係を考える。『狂えるオルランド』は、エステ家に仕えたアリオストが、エステ家への称賛を織り込みつくりあげた。演劇的騎馬試合の考案者たちはこれを、エステ家の宮廷独自の要素としてストーリーに取り入れたと考えられる。第三節では、《祝福された島》に登場する女神ウェヌスについて、この上演における特殊さとその出典を明らかにする。

第四章では、1569年当時の支出記録や給与記録、そして外国に滞在する大使たちの手紙をもとに、具体的な舞台装置や出演者、準備を担当した職人たちについて考察する。

第五章では、1561年の謝肉祭で上演された《ゴルゴフェルサの城》と《フェローニアの山》、1565年にアルフォンソ二世と公妃バルバラ・ダウストリアとの婚礼で上演された《愛の神殿》、1569年にオーストリア大公カールの来訪に合わせて上演が企画された《祝福された島》、そして1570年にアルフォンソの妹ルクレツィア・デステと、ウルビーノ公の子息フランチェスコ・マリア・デッラ・ローヴェレとの婚礼で上演された《きらめく魔法使い》、以上五度の上演について、その詳細を、祝祭後に主催者たちによって出版された公式記録から明らかにする。

第六章では、演劇的騎馬試合がアルフォンソ二世のもと、その性格を変えていく様子を明らかにする。1561年の上演では、従来の騎馬試合と大きく異なるものではなかったが、1565年、1569年と回を重ねるごとに、企画者たちはこの催しをより音楽劇に近いものへと変化させていった。この事実について、出版された記録から実証したい。

第七章では、演劇的騎馬試合が上演されなくなった後のアルフォンソ二世の宮廷について、さらには17世紀に入り、アルフォンソは没してフェラーラもエステ家の領土ではなくなった時代にも目を向け、1560年代のフェラーラにおける演劇的騎馬試合が与えた影響について検討する。

以上の全七章によって、本論文では、これまで芸術史において重要と見なされていなかったアルフォンソ二世の演劇的騎馬試合が、後にオペラやバレエ、演劇へと分化し、それぞれのジャンルとして確立する前の、混沌とした状態でもあり、また、諸芸術や文芸まで、幅広い要素を融合した総合芸術と呼ぶべき催しでもあったということが明らかとなる。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（ 小松 啓子 ）	
論文審査担当者	（職）　　氏　名 主 査　大阪大学　教授　　伊東 信宏 副 査　大阪大学　教授　　輪島 裕介 副 査　大阪大学　教授　　桑木野 幸司 副 査　大阪大学　准教授　　鈴木 聖子 副 査　岡山県立大学　准教授　　岡北 一孝

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　アルフォンソ二世・デステ治下のフェラーラにおける演劇的騎馬試合
　　―「驚異の祝祭」の発想と上演 ―

学位申請者　小松 啓子

論文審査担当者
主査　大阪大学教授 伊東 信宏
副査　大阪大学教授 輪島 裕介
副査　大阪大学教授 桑木野 幸司
副査　大阪大学准教授 鈴木 聖子
副査　岡山県立大学准教授　岡北 一孝

【論文内容の要旨】

本論文は 16 世紀後半のアルフォンソ 2 世・デステ(1522-1597)が、フェラーラで展開した「演劇的騎馬試合」と呼ばれる一連の行事を取り上げ、その詳細を追いながら、この行事が持っていた意味を明らかにし、これによって音楽史、演劇史のみならず、美術史や庭園史などにもまたがるその芸術史上の意義について論じようとするものである。「演劇的騎馬試合」とは、濠に奇天烈な造形の怪物が浮かび、魔女の誘惑に陥落した騎士たちが庭園でニンフと踊り、炎や花火が飛び交って古代神話の女神たちが歌うという、オペラ・バレエ・演劇、さらにはスポーツ・詩・歴史語りといった諸芸能に分化してゆく以前の壮麗な催しであった。

全体は序論と７つの章、そして結論、そのほかに参考資料一覧から成り、この調査によって掘り起こされた貴重な図版、および労作と言える一覧表などを含む。

以下に論文の構成を述べる。

第一章では、まず 15 世紀以降のフェラーラについて、そして君主であったエステ家の当主たちについての概観が示され、さらに 15 世紀から 16 世紀にかけての、フェラーラを取り巻く状況がまとめられる。それらの状況とは、イタリア戦争、神聖ローマ帝国やフランス王国といった大国の関係、さらにフェラーラ接収を狙うローマ教皇との 100 年近くにわたる厳しい関係、などである。第二章では、「騎馬試合」という催しの歴史について、簡単に述べた後、当初のフランス起源のものから大きく変容を遂げた 16 世紀の騎馬試合について、代表的な事例をあげて分析を加える。そしてこれらどの騎馬試合とも異なる独創的な性格をもつアルフォンソ二世の宮廷の演劇的騎馬試合について、もっとも特徴的だと考えられる 1569 年の《祝福された島》を紹介している。第三章は、アルフォンソ二世治下の演劇的騎馬試合の出典について論じている。それらは、同時代のフランスのカトリーヌ・ド・メディシスによる祝祭、エステ家に仕えたルドヴィーコ・アリオストの長編叙事詩『狂えるオルランド』、さらに古代のウェヌス神などである。第四章では、1569 年当時の支出記録や給与記録、そして外国に滞在する大使たちの手紙をもとに、具体的な舞台装置や出演者、準備を担当した職人たちについて考察する。第五章は、《ゴルゴフ

ェルサの城》と《フェローニアの山》(いずれも 1516 年)、《愛の神殿》(1565 年)、《祝福された島》(1569 年)、そして婚礼で上演された《きらめく魔法使い》(1570 年)、というフェラーラ宮廷による五度の上演について、その詳細を、祝祭後に主催者たちによって出版された公式記録から明らかにする。第六章では、演劇的騎馬試合がアルフォンソ二世のもと、より音楽劇に近いものへとその性格を変えていく様子を明らかにする。第七章では、演劇的騎馬試合が上演されなくなった後のアルフォンソ二世の宮廷について、さらには 17 世紀に入り、アルフォンソは没してフェラーラもエステ家の領土ではなくなった時代、貴婦人たちの声楽曲（コンチェルト・デッレ・ダーメ)、「牧歌劇」、さらにはオペラ・トルネオと騎馬バレエ、そしてパルマの「テアトロ・ファルネーゼ」(1617-19 年の建設）などの形で、上記アルフォンソ二世時代の文化が影響を与えてゆくことが論じられる。そして結論で、これまで芸術史上重要と見なされてこなかったアフフォンソ二世の演劇的騎馬試合が、のちにオペラ・バレエ・演劇へと分化してゆく以前の混沌であり、同時に一種の総合芸術とも言うべき催しであった、と論じられて閉じられる。

全体は A4 で 95 ページ（400 字詰め換算で約 300 枚）である。

【論文審査の結果の要旨】

本論文に関する口頭試問は、2025 年 2 月 7 日（金）に、2 時間あまりにわたって実施された。肯定的な評価としては、まず論文の着眼点のユニークさが挙げられる。「演劇的騎馬試合」という催しは、通常の意味での美術史や音楽史の対象には成りがたいものだが、見方によっては「オペラ」や「バレエ」の誕生、といった重要なトピックに直結するものであり、しかも筆者のこの見解はかなり妥当性の高いものであると考えられ、このテーマはいわばこれまでの研究の盲点を突くものとなっている。

さらにその調査と整理についても高く評価された。そもそもこのフェラーラの「演劇的騎馬試合」については、まとまった先行研究は希少であり、現地での調査によって掘り起こされた手書きの一次資料を丁寧に読み解く必要がある。歴史研究にとっては当然の作業ではあるが、筆者はそれをコロナ禍の障害を乗り越えて黙々とこなし、ここに一つの一貫した叙述を組み立てたことは大きな価値を持っていると思われる。

ただ叙述のあり方については、要求も出た。まず序論においてこの論文の学術的問題設定をもう少し踏み込んで書いておくべきだった、という指摘があった。確かに、「音楽史」「美術史」「スポーツ史」などにまたがる対象として読み解く、と言っても、そのそれぞれの学問分野自体が、近代の芸術や技芸の分化以降に成立しており、その概念設定や方法論についてはより意識的な取り組みが必要だった点は否めない。また第一章における歴史の概要については、博士学位論文では、より慎重、繊細な典拠の示し方が求められる、という指摘もあった。

また、もしここにイタリアの地図、あるいはフェラーラの現在と過去の地図、さらにこれらの催しが行われた会場や宮殿の平面図、などを取り入れることで、より説得力は増しただろうという意見もあった。重要な役割を果たしている催しの演し物の図については、より詳細で一貫したデータが必要であり、さらにそれらの一覧表を用意することも望まれる。

これらいくつか望まれる点は残るものの、本論文が、日本はもとより、イタリア本国でもこれまでほとんど注目されてこなかったエステ家の（フェラーラの)「演劇的騎馬試合」という興味深い対象を探り当て、本格的な調査を踏まえてその芸術史上の意味について浮かび上がらせた優れた研究であることは疑い得ない。本論文の内容は、英語などで発表されれば国際的にも注目を集めることだろう。上記に指摘された諸課題についても、学位申請者自身よく理解しており、今後の研究の基礎として本論文の重要性は十分に認められる。

以上のような点から見て、本論文を博士（文学）の学位にふさわしい価値を有するものと認定する。